

顔の顕れと不在の表象¹

——写真・人型・鏡の文化政治——

林みどり HAYASHI Midori

1. 〈顔〉を拒絶する顔

2017年の香港特別行政区行政長官選挙の候補者選びにたいする、中国の全国人民代表大会（全人代）による統制への異議申し立てとして9月末に始まった香港での反政府デモは、2014年を代表する出来事のひとつとして記憶に新しい。催涙ガスを避けるためにデモ参加者たちが傘をさしたことから「雨傘運動」と呼ばれるようになった反政府運動は、香港中心部の金鐘（アドミラルティ）地区を中心とする粘り強い占拠運動となって2ヶ月半続いたのち、香港政府当局による強制排除を受けて収束した。

しばしば指摘されるのは、「雨傘運動」と2011年のウォール街占拠運動が、ともに明確な指導者や指揮系統が存在しない点で共通していたことである。中心となる民主派リーダーがいなかったわけではないが、彼らの意志を超えて運動はひろがっていった。よく知られるように、理由のひとつにあげられているのは、ソーシャル・ネットワークキング・サービスといった、従来からの伝統的な政治動員とはまったく異なるメディアの存在である。同様の現象はいわゆる「アラブの春」でも生じた。批評家のW・J・T・ミッチェルがユーモラスに表現しているように、2011年のエジプト革命のデモの中心となったタハリール広場は「フェイスブックのアカウントを開いたかもしれないが、革命のアバターとして〔運動全体を〕代表する〈顔〉が前面に出ることを拒絶した」（Mitchell 2012: 9）。

反政府行動が具体的な〈顔〉をもたなかったのは、一面では〈顔〉に連動している具体的な身体が警察によってとらえられ拷問されるという、現実的な危険を回避する戦術的目的のゆえだったことはまちがいない。しかし〈顔〉をもたなかったもうひとつのより重要な

理由は、もっぱら権力の中心をもたず匿名性にこだわるというオキュパイ運動の思想的原理に根ざしていた。空間占拠を戦略とするグローバルな変革運動は、群衆内のマジョリティを利することによってマイノリティを再生産する伝統的な代表制や、ポピュリズム的なカリスマ指導者の形象を拒絶し、中心的権威の拒絶と匿名性の保持にこだわった。ミッチェルは「顔が出現するときには、匿名の個人の顔か、無限に反復可能な〈仮面〉の顔となる。それはたとえばガイ・フォークスののにやにや笑いの顔のような、どうにも無骨で似つかわしくない非暴力革命のアイコンのようなかたちをとるのだ」としている (Mitchell 2012: 9)。

ミッチェルのみるところ、タハリール広場にせよウォール街占拠運動の舞台になったズコッティ公園にせよ、グローバルに流通した反政府運動のイメージは、蟻集し群れなす集団的な形象と無名の個々の抵抗者という、両極をなすふたつの像のどちらかをとり、明確な輪郭を描かなかった。このように一般的に代表的な〈顔〉をもたない運動は、匿名の群衆と無名の個人という、イメージの「弁証法的両極」のあいだを振れる特質を避けがたく帯びるという (Mitchell 2012: 9-10)。歴史的な文脈は異にするが、ここでわたしが想起するのは、1970年代後半以降、アルゼンチンの人権組織「五月広場の母たち」(以下「母たち」)が展開した運動である。当時から「母たち」の運動は国際的に反響が大きく、その視覚的イメージはひろく流通したが、そこでもやはりこのたびの反政府運動と同じようなイメージの両極性があったことに思い当たるからである。

「母たち」の運動は、やがて急速に拡大していく過程でエベ・ボナフィーニという強烈なカリスマ的指導者を戴くにいたって、具体的な〈顔〉を有する伝統的な政治運動へと変質・回帰する傾向にあったことは否定できない。しかしすくなくとも運動が始められた当初は中心的権威をもっておらず、国内外で流通し消費されたイメージは、メディア化されやすい匿名の群衆とそこからこぼれ落ちる無名の個人のあいだを揺れ動いた。カリスマ的指導者を担ぎあげたがるポピュリズムの政治伝統が強いラテンアメリカにあって、初期の「母たち」の運動がもっていた独自性はこの点で際だっていたのである。

1976年から7年あまり続いた軍事独裁政権のもとで、苛烈な国家

的テロリズムが展開されたアルゼンチンでは、人権組織の試算によれば3万人とされる強制失踪者が生まれた。「母たち」は、これら強制失踪者を子にもつ母親が主体となって生まれた組織で、アルゼンチンのみならずラテンアメリカを代表する人権運動組織へと拡大していった。彼女らの示威行動はいたって単純なものだった。毎週木曜の午後3時半にブエノスアイレスの五月広場に集まり、失踪させられた息子や娘の写真、名前、失踪した日付を書いたカードやプラカードを身につけて、独立記念塔の周囲を反時計回りで歩く。ただそれだけである。しかし正面には大統領官邸、向かって左には大聖堂、右側には主要官庁、背後にはアルゼンチン独立の拠点となったカビルド（旧市議会庁舎）が控える空間、いいかえれば政治権力、宗教権力、行政・経済権力、歴史的権威という国家存立の根幹をなす権威・権力に囲まれた中枢とっていい五月広場を、凡庸な一介の主婦たちからなる抗議集会が占拠するなどというのは、前代未聞のことだった。



強制失踪者の写真を掲げる「五月広場の母たち」
出典：Asociación Madres de Plaza de Mayo（2007: 48）

「母たち」が結成されたのは1977年とされているが、実際には組織設立の明確な起点があったわけではない。当初あったのは、軍部

や警察はもとより裁判所や教会からも見放されて、子どもたちの行方を知る手がかりの一切を断ち切られた14人の母親たちの絶望だけだった。彼女たちが戒厳令下の厳しい監視をかいくぐって、週に一度、大統領官邸前に集まったのは、政治的な示威行動のためというよりなにより、いてもたってもいられない切迫感のゆえであった。

わらにも縋る思いでそこに行けば、同じように子どもや夫を連れ去られた女たちと会える。わずかばかりの手がかりを求めて情報交換することができる。ことばをかけあい、励ましあい、寄る辺ない境遇を支えあうことができる。五月広場の集まりは、絶望に閉ざされた暗闇に点された小さな灯火にすぎなかったかもしれないが、そのかすかな光のなかで彼女らはたがいを見やり、手を取りあい、寄り添いあい、支えあい、結びついていったのである（林2010: 184）。

このような「母たち」の運動には、最初から顔が存在した。ただしそれは運動を代表したり象徴する指導者や英雄の〈顔〉ではなく、増殖する幾百もの顔写真であった。彼女らは公共の場で家族の顔写真を示しながら、奪われた家族の生の権利を保証するよう求めただけでなく、彼ら／彼女らが奪われ行方知れずになっていることがいかに残酷な事態であるか、その苦悩を公的な場にさらけだし、苦しみを訴えた。

生まれたばかりの赤子から老年まで、男もいれば女もおり、学生、労働者、主婦、農民、医者、弁護士、店員、商店主、等々。数百、数千と数えきれないほどの顔、顔、顔。つぎからつぎへと増殖していく顔の群れ。「母たち」のひとりひとりがその身に帯びていた失踪者の顔の背後には、個別の生の歴史を負ったドラマがあった。「母たち」はそれをたがいに語りあい、また集会にやってくる人びとに語り伝えることをつうじて、〈強制失踪者〉とひとしなみに括られる集団の内部には多様な生き様があり、歴史＝物語があることを知らしめたのである。ある批評家は「母たち」の運動を、法の演劇化が効果的に働いた好例であるとしている。「母たち」は、家族や痛みといった「私的な内のことがら」を政治や社会といった「外」に向けて「折り返し」、また「逆に外のがらを内に折り返す」という、「新しい法のドラマ」としての人権概念をひろめたのである（Yúdice 2003: 74-75）。

おもしろいことに、こうした写真のおおくは身分証明書からとら

れていた。本来、身分証明書は、群衆を個別化し可視化するために統治者が用いた社会監視装置である。「母たち」は社会監視装置であったものを逆手にとり、ほかならぬ監視をおこなっていた統治権力によって消し去られた個人を可視化するために、社会監視装置そのものを流用したのである。

そもそもダゲレオタイプのごく初期には、個人の人物像を記録する媒体だった写真は、第二次世界大戦のホロコーストやヒロシマを経て、「不在の表象」をどのように「記憶化」するかという、きわめて困難な作業と結びついた。倉石信乃が『スナップショット』のなかで、土田ヒロミの写真連作「ヒロシマ」に触れて述べているように、ホロコーストや原爆のように、「大多数の犠牲者の群れが常に不可視であること」が、「20世紀の『写真と群衆』をめぐる底なしの問い」を誘発してきた（倉石 2010: 130）。アルゼンチンの強制失踪者も同様の問いを負っているといっている。その意味では「母たち」による顔写真の利用は、あまりに犠牲者の数が膨大であることによって、逆に犠牲の大きさが不可視化され、死そのものが見えないものにされてしまうことに抵抗する、ひとつの戦術だったといえるのである。

2. 不在の表象と顔

強制失踪者の匿名化と個別化の運動に、もうすこし別の角度から光を当ててみたい。注目したいのは、「大きな影絵」を意味する「シルエタツ」と名づけられたアート・プロジェクトである。

苛烈な人権侵害にたいする国内外の批判に加えて、経済政策の失敗やマルビーナス（フォークランド）紛争の大敗を受けて、軍事政権が最期を迎えつつあった1983年のこと。ロドルフォ・アグレベリイ、フリオ・フローレス、ギジェルモ・ケクセルの3人のアーティストは、視覚表現をつうじて軍事政権が生みだした強制失踪の規模の大きさを告発しようと、「母たち」に抵抗のアート・プロジェクトを協働しようともちかけた（Longoni & Bruzzone 2008: 63）。紙製の人型を、強制失踪させられた人びとの数と同じ3万枚作って一面に展示するという、壮大なプロジェクトであった。

当初このプロジェクトは、閉じられたギャラリー空間で構想されていた。しかし3万枚の人型を展示するために必要な広さの施設を確保するのは不可能であることがわかったことから、やむなくブエノスアイレスの街を展示会場にする案が偶然の産物として生まれたのであった。

こうして「シルエタツ」は、反政府デモの「抵抗の行進」に組み込まれるかたちで実現した。「母たち」が主催して1981年に始められた「抵抗の行進」は、3回目のこの年ばかりはいつもとは様子が違った。春先9月の淡い日の光のもと、道路脇の壁という壁、塀という塀、木々、記念碑、公園のベンチでは、同じ形の「大きな影絵」がひらひらと頭や腕をたなびかせたからだ。デモの参加者たちは、街中に貼られたこれら匿名の人型におもいおもいのしかたで失踪家族の名前や年齢、服装、似顔絵を描いたり、写真をコラージュするなどして「個性」を与えていった。こうして公共空間での参加型のアート・プロジェクトになったことで、「シルエタツ」はたちまち世界中で反響を呼ぶことになった。だがそれは、主催者が期待していたのとは逆の事態であった。

そもそもプロジェクトを発案した3人のアーティストと、彼らの意図を汲んでプロジェクトを具体化した「母たち」が発案・企画段階で構想していたのは、同型反復するシンプルな人型を延々と連ねることによって、強制失踪の規模の大きさを視覚化することであった。同じ型の人型を用いた空間造形は、空間全体に統一感や整列感をもたらしリズムを生む美学的試みとなるだけでなく、「強制失踪者は3万人にしてひとり」という「母たち」のテーゼを視覚化する政治的試みになるはずだった。

「強制失踪者は3万人にしてひとり」は、「母たち」の運動の根幹をなす主張である。強制失踪者とひとくちにいても、当然のことながら3万人は一枚岩ではなく、左翼活動家も含まれていれば一介の学生もおり、貧民街でボランティア活動をしていた医者もいれば、戒厳令下で厳しく禁じられていたストライキの指導者もいた。そしてそこには武装ゲリラのメンバーも含まれていた。キューバ革命成功の余韻が社会にひろく共有されていた時期にあって、独裁的な状況を打破する可能性は武装抵抗にありと信じた人びとは、1960年代以降、反政府勢力のいわゆる極左を占めており、やがて1970年代に

入ると共産主義ゲリラ「人民革命軍（ERP）」や都市ゲリラ「モントネロス」を組織して地下に潜り、武装抵抗の激しさを増していった。

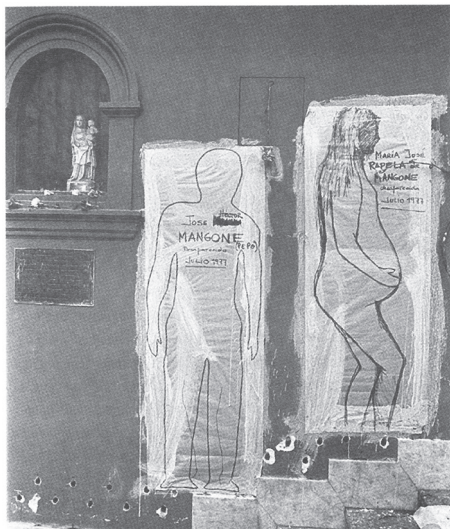
軍部による人権侵害を容認する層は保守層を中心に根強くあったが、そのさい理由としてひきあいになされたのが「軍部の暴力と左翼ゲリラの暴力はともに等しく悪である」とする見方であった。ゲリラ掃討のためには不可避であったとして、軍政下での苛烈な人権侵害を許容するだけでなく、批判勢力を分断しかねない、「ふたつの悪魔理論」として知られるこの見方を、「母たち」は厳しく批判し、退けた²。「ふたつの悪魔理論」にしたがえば、軍によって拉致され、拷問され、虐殺されたかもしれない一部の強制失踪者は、ほかならぬ彼ら／彼女らを連れ去り、責め苛み、永遠にどこかに連れ去ってしまった軍人同様加害者ということになるわけであって、「母たち」にとってそれはとうてい受け入れがたい見方だったからだ。

「シルエタツ」が企画された1983年は、この「ふたつの悪魔理論」がまだ強い効力をもっていた時期にあたる。当時の状況にかんがみれば、「母たち」の組織が同型反復の人型で表現される強制失踪者に固執した理由がわかる。同型反復される3万の人型は、強制失踪者の規模の大きさを示すだけでなく、犠牲者を二分することによって制度的テロリズムの本質的な在処を曖昧化しようとする言説にあらがう、抵抗でもあったのだ。

だが上述したように、同型反復することで犠牲者の等質性を表象するはずだった匿名の人型は、閉じられたアート・ギャラリーを飛び出たことによって、まったく別の様相を帯びることになってしまった。一方的に眼差され鑑賞されるだけで一切の変更が許されない神聖なオブジェから、観客の参加を誘う一種のリレーショナル・アートへと変質してしまったのである。

「抵抗の行進」の目的から逸脱しかねない現象に慌てた主催者らは、名前や日付が書き入れられた人型を、身体の輪郭を描いただけの単純な輪郭図で差し替えた。こうして「シルエタツ」の試みは、いったんは脱個性化され匿名化されなおしたのだったが、ほかならぬ抵抗運動に最も熱心な参加者たち——「母たち」のような——によって、強制失踪者像の抽象性はふたたびなし崩しにされていったのである。街のあちらこちらに描かれた3万の人型の輪郭には、このたびは強制失踪者の名前や拉致された日付が書き加えられただけ

でなく、ある人型は太った男性へ、ある人型は小柄な女性へ、臨月の妊婦へと描きかえられていった。ある人型は屈みこみ、別の人型は腕を差しのべるといった具合に、無味乾燥な統一規格の人型だったものからは滑稽みや親近感が感じ取られるようになり、仁王立ちの正面立像にはさまざまな動きが付与された。むろん不在の家族への情愛や思慕の念がそこに刻み込まれていったことはいうまでもない (Patrino 2011: 114-115)。



大聖堂の壁に貼られた強制失踪者夫婦
マリアとホセ・マンゴネのシルエット
出典：Longoni & Bruzzone (2008: 107)

ここには、運動組織の匿名集団化の論理と個人の論理の「弁証法」が、鮮やかに示されているといい、とはいえ、運動の内側にいた人びとにとっては、実際には両論理はさほど対立しあうものではなかったかもしれない。なるほど同型反復される人型は、社会・経済的な利害において対立しうる人びとを、強制失踪者家族という一点で結びつける象徴として機能する。他方で、具体的な個人の印を公共空間に刻む作業は、他に代替することのできない個別化された喪失の痛みをつうじて、残された家族自身が社会との絆を結びなおす作業だからである。

「母たち」にとって、壁や扉に描かれている個別の彼／彼女は、跡

形なく消し去られてしまった彼／彼女が存在したこと——そしていまここに存在しないこと——を示す痕跡であると同時に、生死も知らされぬまま残されて喪失に痛む「わたし」自身の一部であったろう。愛する対象を失うとは、対象をなくしたことを意味するだけでなく、愛する人とともにいた自分自身の一部を喪失することと同義であるとするフロイトを援用するなら、そこに人型のかたちをとって姿をあらわしているのは、愛する人を失った「わたし」の一部として、「わたし」を苦しめ続けている当の傷である。「わたし」は「わたし」の可傷性をそのように公共空間にさらけ出すことによって、内へ内へと穿っていく喪失の悲しみを外へと裏返す。そのことによって悲嘆を「わたし」の牢獄から解放してやれるのである。

そのとき「わたし」は、「わたし」とは異なるかもしれないけれど、同じく可傷性を抱える他者とのあいだに、可傷性を介したつながりを作り出すための条件を手に入れるだろう。ジュディス・バトラーであればそれを、喪失の悲しみにとどまることによってはじめて回復しうる、人間存在の根源的な可傷性の感覚ととらえ返すだろう。またそこに、たがいの身体的な生にたいしてわたしたちが負っている、集団的な責任への意識を見いだすことだろう (Butler 2004: 30)。個人の印が記された人型は、匿名化され抽象化された人型とは別のしかたで、個別の利害を超えた結びつきを可能にしうるのである。

3. アイデンティティを穿つ顔

顔写真にせよ「シルエット」にせよ、直接的に拉致され失踪させられた人びとの場合、名前や拉致の日付、顔や身体的具体な特徴を手がかりに、彼ら／彼女らを不可視の存在から表象の明るみへともたすことができる。しかし76年以降の軍政下では、直接拉致された人びとだけでなく、拉致されたときに母親のお腹のなかにおいて、その後、軍の秘密監禁施設で生まれた子どもたちも行方不明になった。強制失踪者の子どもたちは生まれると同時に出自を抹消され、親から引き離されて、軍の「戦利品」("botín de guerra")として、子がほしい軍人や警察関係者に引き取られたからだ。

その子どもたちの顔つきや体つきはむろんのこと、何月何日に生まれ

たのか、そもそも生まれたのかどうかすらわからない。性別や名前も不詳である。存在した痕跡すらない。その意味において、強制失踪者の子どもたちの存在を穿つ不在は、生の痕跡が家族のもとに残されている親の強制失踪者たちより、はるかに根源的である。いわば「究極の強制失踪者」といいいい彼ら／彼女らの数は推計500人にのぼり、そのうちすくなくとも2014年12月初旬までに116人が血縁者との「再会」をはたしている。

強制失踪者らの子どもたちを探す動きは、すでに軍政下で始められていた。この場合もやはり中心となったのは女性たちで、「母たち」の結成とほぼ時期を同じくして、孫の行方を探して返すよう求める「五月広場の祖母たち」(以下「祖母たち」)が結成された。強制失踪者の子どもたちの行方を探すのは、一般の強制失踪者を探すのに比べてはるかに厄介だった。しばしば強制失踪者の足取りを追うにあたって手がかりになった、秘密監禁施設での目撃情報やそこで得られた噂話も、その子どもたちの捜索にはまったく役に立たなかったからである。

そこで「祖母たち」が呼びかけた対象は、ほかならぬ強制失踪の犠牲者自身、つまり強制失踪者の子どもたち自身であった。新聞、雑誌、テレビ、文化イベントのフライヤー、ホームページやインターネット、ツイッターなどのソーシャル・ネットワーキング・サービスをつうじて、「祖母たち」は、「もし自分のアイデンティティに疑いをもったなら、おばあちゃんたちに電話して」と若者たちにメッセージを発信し続けたのである。「祖母たち」は早い段階からDNAの検査機関と連携することで、秘密を守って安価にDNA検査ができるシステムを構築した。「おばあちゃんたちに電話」するか、「祖母たち」のDNA判定専用アドレスに電子メールを送りさえすれば、誰でも簡単にDNA検査をすることができる。加えて政府への粘り強い働きかけの結果、強制失踪者から生まれたことが疑われる個人のDNA採取の権限を政府に付与する法律が、2009年11月19日にアルゼンチン上院で可決された(Marinero 2009)。国をあげた支援を約束されて、DNA検査は「祖母たち」の活動の最重要課題のひとつになったのである。



ABUELAS
DE PLAZA DE MAYO

No dejes a tu hijo la herencia de la duda



Resolvé tu identidad ahora

出産世代にある「究極の強制失踪者」らへの呼びかけ
「あなたの子どもに疑いの遺産を残すのはやめましょう。
あなたのアイデンティティをはっきりさせましょう」
出典：「五月広場の祖母たち」文化センターで配布されていた
フライヤー、2014年8月13日取得

こうして毎年、一桁から十人の単位ではあるが、「究極の強制失踪者」の「アイデンティティ回復」(recuperación de identidad) が実現されてきた。2014年8月には、「祖母たち」によるDNA検査の結果、長年にわたって娘夫婦と孫の行方を捜してきた「祖母たち」の会長エステラ・デ・カルロットの孫が、114番目の「究極の強制失踪者」であることが明らかになり、彼の「アイデンティティ回復」がマスコミを大いに賑わせた。孫のイグナシオ・ギド・モントヤ・カルロットは、1977年に拉致されたエステラの娘ラウラが身ごもっていた子で、生まれると同時に母親の腕から奪われ、子どもがいなかった上級軍人に与えられ実子として育てられた。実の父バルミール・モントヤは拉致され拷問されたのちに殺され、母ラウラもまたイグナシオを生んだ後に殺されていた。何も知らぬまま迎えた36歳の誕生日に、イグナシオは知人から自分が赤ん坊の時に養子にされたこと

を知り、自分の真の出自を知ろうと「祖母たち」をつうじてDNA検査に踏み切った。そしてようやく血のつながった家族にたどり着くことができたという。インタビューのなかでイグナシオは、36年間の「偽」の人生の後に実の祖母やいとこたちと「再会」した自身の経験をふりかえって、「おとぎ話か叙事詩か、聖書に出てくるような歴史＝物語」と述べている (RT 2014)。

一方、祖母のエステラや、同じく祖母のオルテンシア・オールドウラは、孫を回復できたことの喜びをインタビューのなかで語る際に、くりかえしイグナシオと血縁者の身体的な類似を強調して飽きることを知らない。祝福に訪れたフェルナンデス大統領を前に、エステラは写真アルバムをめくりながら、イグナシオと実父の目や顔つきがどれほど似ているかを語り、父方の祖母オルテンシアの92歳の誕生日にやってきた人びとが皆、イグナシオとその父の酷似ぶりに驚嘆したエピソードを開陳してみせている (infobae 2014)。オルテンシアもまた、『クラリン』紙のインタビューのなかで、「イグナシオを見ているとわが子を見ているように錯覚してしまう。まるで透写紙で写しとったみたいにそっくりなのよ」と述べている (Clarín 2014)。

むろんここにひとつの転倒があることには留意しておくべきだろう。実際には、「祖母たち」がイグナシオを家族として認識しうる根拠は不可視の抽象でしかないDNAの判定結果のみであり、身体的な類似性の発見は、後付け的な追認作業でしかない。しかしながら本来イグナシオを血縁者たらしめているDNAの重要性は「再会」の場では後退してしまい、目に見える具体的な顔こそが血縁関係の徴が発見されるべきフィールドであるかのごとくに認識されなおしているのである。

「母たち」にとって顔はあくまで過去の生の記憶の痕跡としてあった。だが「祖母たち」にとって、顔は、〈いまだ来ざる＝来たるべき＝未来〉(por-venir)をたぐり寄せるための徴候としてあるのだ。追認行為は、その未来を現在につなぎ止めるために必要不可欠な作業なのである。

このような顔のいわば徴候的な次元がきわだって戦略的に用いられているのが、「祖母たち」による「アイデンティティ」("Identidad")と題されたインスタレーションにおいてである。実物大に拡大された強制失踪者夫婦の顔写真のあいだに鏡が並べられているだけのシ

ンプルな「作品」で、1998年にブエノスアイレス市のレコレタ文化センターで展示された。



レコレタ文化センターで展示された
インスタレーション「アイデンティティ」
出典：Giunta (2010)

美術批評家のアンドレア・ヒウンタは、「アイデンティティ」の美学的＝政治的作用をつぎのように分析している。「アイデンティティ」では、ちょうど観客の目の高さのところに強制失踪者の顔写真と鏡が展示されることから、写真の顔と鏡に映った自分の顔、写真の眼差しと鏡に映った自分の眼差しのあいだに無限の交差運動が生まれざるをえなくなる。観客はその過程で、いやおうなく眼差しの交差に巻き込まれ、強制失踪を他人事として眺める傍観者であることができなくなる。そのとき制度的テロリズムの外部に立つことの不可能性と現在との連続性が顕わにされるというのである。

また「アイデンティティ」は、このような美学的＝政治的な意識作用とは別に、より具体的な政治的効果をもっていた。自分の本当の出自を知らずにいる若者が、もしかしたら作品の鏡をのぞき込むかもしれない。そのとき強制失踪者の写真のあいだに挟まった自分の顔のなかに、両脇にならんだ両親の顔との共通点を見いだすかもしれない。いまはまだ見ぬ孫たちを40年ちかくにわたって探し続けてきた「祖母たち」が、「アイデンティティ」のインスタレーションに託した最も本質的な狙い、ないし期待はそこにあったのかもしれない (Giunta 2010)。

たしかにヒウンタの指摘にあるように、人権啓発運動などでしば

しば見かける無造作な顔写真の一覧を前にするとき、そこに写っている強制失踪者らは、見ている「わたし」にとっては赤の他人ではない。彼ら／彼女らは決定的に「わたし」の外部に存在していて、写真のなかの彼ら／彼女らを見ている「わたし」の位置が彼ら／彼女らによって揺らぐことはない。だが、「アイデンティティ」のインスタレーションでは、観客は、もしかしたら強制失踪者は「わたし」でありえたかもしれない、「わたし」自身が強制失踪者の子でありうるかもしれないという疑念へと誘われる。

だが、鏡と顔写真のインスタレーションが誘発する疑念は、おそらくそこにとどまらない。

鏡を見ている「わたし」の眼差しと、鏡像の「わたし」が「わたし」に投げかけてくる眼差しのあいだには、認識を揺るがしかねない意識のより深い次元での作用と反作用のようなものが働いているのではないだろうか。フーコーのヘテロトピア論のひそみにならっていえば、鏡を見ている「わたし」は、「わたし」が存在していないはずのそこ、つまり鏡の裏側に仮想的に開かれた非現実の空間に「わたし」自身を見ていることになる。鏡のなかに「わたし」を見るとき、「わたし」は避けがたく「そこ」にいるのだから、「わたし」は「わたし」がいる場所において不在であることを発見させられる。「わたし」がいる場所に「わたし」が不在であるというこの驚くべき発見をつうじて、「わたし」は、鏡面の裏側から「わたし」自身に差し向けられるあの眼差しからあらためて出発して、ふたたび「わたし」自身に戻ってくるのであって、そのとき「わたし」は、「わたし」が存在しているこの場所に「わたし」自身を再構成することを強いられるのである (Foucault 2001: 756)。いわば「わたし」の鏡像から発せられる「わたし」のものであるはずの眼差しは、両脇に並べられた強制失踪者の写真の眼差し同様、「わたし」にとって不気味な他者としてあらわれ、ほかならぬその他者によって「わたし」は再構成されるのである。

そうであるとするなら、「アイデンティティ」のインスタレーションが攪乱するのは、鏡を見ている「わたし」の同一性にとどまらない。鏡像の眼差しと写真の眼差しは、「わたし」を取り巻いているあらゆる空間と「わたし」を関係づけることによって、「わたし」が占めるこの場所をリアルなものにするが、そのときには、もはや「わ

たし」と「わたし」をとりまく周囲の空間の結びつきはなんら自明ではなくなっているからである。「わたし」を現象させている空間の整序性は攪乱され、同一性の概念そのものが無効にされてしまう。

いいかえれば「アイデンティティ」が見せているものは、「アイデンティティ」というインスタレーションのタイトルに反して、「わたし」は自律的な「わたし」であってそれ以外の何者でもないことへの深い疑念である。なぜならそこで「わたし」が目撃しているのは、他者の眼差しのもとではじめて現れる身体であり、それは「わたし」のものであると同時に「わたし」のものでないからである。それはもはや他者の痕跡をぬぐいがたく帯びてしまった身体にほかならぬからである。

[注]

- 1 本稿は、2014年10月23日におこなわれたシンポジウム「〈^{ヘテ}他なる場所〉へ——映像・景観・詩」（於：立教大学）における報告「鏡のヘテロトピア——"Identidad" 究極の強制失踪者たちへ」をもとに、大幅に加筆修正をおこなっている。シンポジウム講演者の倉石信乃氏、石田尚志氏、虎岩直子氏、石山徳子氏からは貴重な意見をいただいた。記して心より感謝する。
- 2 「ふたつの悪魔」論がとりわけ問題になったのは、軍政崩壊後、初の文民政権下で設置された人権侵害調査委員会の長をつとめた作家エルネスト・サバトが、調査報告書『ヌンカ・マス』（1984年）の序文で示した際のことである。サバトは明示的には軍政の制度的テロリズムとゲリラの武装抵抗を同等とはみなしていないが、軍政による人権侵害をはじめて明らかにした生々しい証言集の冒頭におかれた文章のなかで、制度的テロリズムだけでなく武装ゲリラの暴力にも言及していたことが問題とされた。のちに2006年に『ヌンカ・マス』の再版が出されるにあたって同序文は差し替えられた。

[文献]

- 倉石信乃、2010、『スナップショット——写真の輝き』大修館書店。
- 林みどり、2010、「生の管理と情動のコミュニケーション——ふたつの『自由』、南米の場合」山之内靖・島村賢一編『哲学・社会・環境』日本経済評論社、165-192。
- Asociación Madres de Plaza de Mayo, 2007, *Imágenes de la Vida: 30 años de lucha por la vida venciendo a la muerte*, Buenos Aires: Fundación Madres de Plaza de Mayo.
- Butler, Judith, 2004, *Precarious Life. The Powers of Mourning and Violence*, London / New York: Verso. (=2007, 本橋哲也訳『生のあやうさ——哀悼と暴力の政治学』, 以文社)
- Clarín, 2014, "Habló la otra abuela de Guido: 'Verlo a él fue ver a mi hijo,'" *Clarín*, 6/8/2014.
- Foucault, Michel, 2001, "Des espaces autres," *Dits et écrits*, 1954-1988, Paris:

Gallimard, 752-762.

Giunta, Andrea, 2010, "Politics of Representation. Art & Human Rights," *e-Misférica* 7(2), Hemispheric Institute, (accessed on: 2014-09-01, <http://hemisphericinstitute.org/hemi/en/e-misferica-72/giunta>).

infobae, 2014, "Cristina Kirchner recibió a Estela de Carlotto y su nieto recuperado en la residencia de Olivos," (accessed on: 2015-2-6, <http://www.infobae.com/2014/10/23/1603832-cristina-kirchner-recibio-estela-carlotto-y-su-nieto-recuperado-la-residencia-olivos>).

Longoni, Ana & Gustavo Bruzzone eds., 2008, *El Siluetazo*, Buenos Aires: Adriana Hidalgo editora.

Marinero, Ximena, 2009, "DNA from suspected 'Dirty War' children," *Jurist*, (accessed on 2015-2-5, <http://jurist.org/paperchase/2009/11/argentina-senate-approves-law-to-compel.php>).

Mitchell, W. J. T., 2012, "Image, Space, Revolution: The Arts of Occupation," *Critical Inquiry*, 39(1): 8-32.

Patrino, Luigi, 2011, "Estéticas del disenso. Desapariciones, exilios y políticas de la visibilidad," *Letral*, 6: 112-130.

RT, 2014, "El nieto recuperado de Estela de Carlotto: 'Mi historia es una historia de humanidad.' Entrevista exclusiva con el nieto recuperado de Estela de Carlotto," (accessed on: 2014-2-5, <http://actualidad.rt.com/actualidad/view/149061-nieto-estela-carlotto-rt-historia-humanidad>).

Yúdice, George, 2003, *The Expediency of Culture: Uses of Culture in the Global Era*, Durham & London: Duke University Press.